

第4学年 国語科の実践

1. 単元名 物語を読んで考えたことを話し合おう
「ごんぎつね」新美南吉作（全12時間）

2. 単元目標

- 場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述をもとに想像して読むことができる。
- 物語を読んで考えたことを伝え合い、互いの考えの共通点と相違点を考えながら話し合うとともに、友だちの考えを受けて自分の考えを作ることができる。

3. 「ひびき合う子どもたち」にせまるための手立て

研究課題・・・子どもが解決したい問題を持ち、友だちとひびき合いながら学習する子どもの育成
手だて・・・子どもの願いや思いの育ちを見とった単元構想と授業づくり

中学年ブロックテーマ

「追究する力、仲間と支え合う自分」

・自分の問題をとことん追究する姿 ・仲間と協働して追究する姿

4. 単元と指導

① 単元と教材について

本単元は「C読むこと」の②内容（1）のウ「場面の移り変わりや情景を、叙述を元に想像しながら読むこと」、エ「読み取った内容について自分の考えをまとめ、一人ひとりの感じ方に違いがあることに気づくこと」、カ「書かれている内容の中心や場面の様子がよく分かるように声に出して読むこと」にあたる。

薄暗いじめじめとした森の中の穴で、一人さびしく暮らしていた「ひとりぼっちのこぎつね」である「ごん」の物語である。1から5の場面まで、「ごん」の視点でかかれ、子どもたち自身が「ごん」に心を寄せながら、読むことのできる作品である。また、美しい情景とともに、選びぬかれた言葉の中に「ごん」の気持ちが表現され、心情の変化がとらえやすい。

その「ごん」は、村人の生活を左右しかねない重大ないたずらを、さびしさを晴らすかのように繰り返していく。そんな「ごん」の幼さも、読者の4年生には身近に感じられるだろう。しかし、そんな「ごん」が、自分のいたずらが関係して母親を失った兵十に、懺悔の気持ちを抱くと同時に、「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」と、人間に対してこれまでに感じたことのない親近感を感じる。そこで心情が大きく変化し、兵十へ、いたずらの「つぐない」が始まるのである。「次の日には・・・」「次の日も。その次の日も・・・」「その次の日には」はと、ひたむきな「つぐない」は、繰り返されるうちに「くりだけでなくまつたけも」持って行くようになり、さらに強い親近感へと変化していく。物語の中盤、月夜の晩に、「兵十」と仲間の「加助」が歩く場面がある。「ごん」は「二人の後をつけて」行ったり、「お念仏がすむまでいどのそばにしゃがんで」いたり、「兵十のかげぼうしをふみふみ」行ったりして、二人の話の中に自分の存在に気づく時が訪れるのではないかと、言い出せずも期待している気持ちが表現されている。だから「それは神様のしわざ」となった時には、自分の存在そのものがみじんも意識されていないことに「引き合わないなあ。」とがっかりするのである。この

落胆がさらに兵十との距離を縮めたいと思うきっかけにもなっている。

物語の最後に、その距離を縮めたいと家の中まで入って栗を土間においた「ごん」を悲劇が襲う。この場面で視点は「兵十」となり、心に大きな変化を経てきた「ごん」との違いが大きく浮き彫りになっている。最初の場面のいたずらを繰り返す「ぬすつとぎつねめ」から、最後のこの場面まで「あのごんぎつねめ」と、みじんも「ごん」に対して見方を変化させていないことが明確になり、その気持ちのすれ違いが、うめようもなく大きなものであることに、読者は気づかされるのである。「兵十」は、「足音をしのばせて、近寄って」間違いなく憎い「ごん」を打つ。「おまいだったのか、いつも、くりをくれたのは。」とはじめて「ごん」のしたことに基づき、「ごん」の思いははじめて伝わったのである。「青いけむりが、まだつつ口から細く出て」いるほど、少しの差で命を落とさねばならなかったことが、大きな悲劇として心に残る。ばたりと銃を取り落とした「兵十」の後悔も、たった今であるのにすでに遅い。ただ、撃たれた「ごん」は、目を見開いて兵十をにらむわけでもなく、目に涙をにじませることもなく、静かに「目をつぶったまま、うなずく」のである。兵十の前に存在を明らかできたことは、喜びとまでは行かなくても、安堵感で満ち、「よかった。」と思っていることがそこに表現されている。

葬式の参列者が、まっかな彼岸花を踏み折っていく場面にも暗示されているが、存在に気づかず、無残にもひたむきに生きるものや美しく生きるものを、無碍にしてしまう人間の愚かさが描かれているともとれる。そうした主題にまで4年生が迫るのは難しいが、悲劇の結末を生むことになった所以を、登場人物を通して語り合い、読み解いていくことで、想像豊かに心情に迫ることができる。

②指導について

○子どもにとって価値のある学習になるために○

国語の学習は、ひとつの物語について、何度も話し合いながら学習がすすむ。これが、長くて何のためにやっているのか分からなくなり、飽きてしまうこともしばしばある。友だちと話したくなるような物語との出会いを設定すること、登場人物の気持ちについて繰り返し話す必要性を感じる必要がある。そこで、本単元の導入以前に、二つのことを取り入れた。

一つ目は、本を読むことの意味にふれられるように、教科書にある「生活の中に生きている読書」という部分を先行して扱うことにした。この単位では、読書をするという意味を「それまで知らなかったことを知る喜び」「本の中での人々との出会いが、今までにない不思議な気持ちを体験できるとともに、新たな自分を認識できたことへの喜び」として説明されており、「読書は心の冒険のようです。」とまとめている。この単元で、「読書をする意味は何か？」を考える事で、読書の可能性を明確にしたい。これまでの国語での学習をふり振り返りながら、子どもたちとともに「読書をする意味は何だろう？」と考え合えば「登場人物の気持ちを読むことで、人の気持ちを理解する力が高まる」「読むことで、自分の物事の見方や考え方を作る。」など、読書を通して考えたり、感じたりすることが、「自分を作る。」ことであると理解できる。いろいろな気持ちを想像し、異なる考えを聞きながら、自分なりの解釈を作り出していく学習が、子どもたちの中に価値づくこと、授業で友だちとともに「協働的な冒険をすること。」の良さを理解させていく。初発の感想交流で、「どこの場面の、誰の気持ちをみんなで話し合いたいのか？」という視点は、こうした価値が理解できてこそ生まれてくると考える。

二つ目は、「ごんぎつね」がどんなお話なのか、「どんなきつねなのか？」に興味を持つために、事前の読書タイムで、新美南吉作品を読み聞かせていく。新美南吉作品には、狐や猟師を扱った物語が他にもある。そんな関連のあるものを中心に読んでいくことで、「今度はどんなきつねだろう？」「前は、心の温まるお話で、その前はユーモアのあるお話だったけど、今度は？」とシリーズで異なる味わいを見せることで、興味が沸くであろう。一つ目の読書を積み重ねることのよさと合わせて、新美南吉シリーズが多読できるよう、「新美南吉コーナ」を作る。図書館司書との協力で、他の図書館とも連携し、図書を充実させる。また、多読し作品を比較したり、読書を積み重ねていったりすることの良さを味わえるように、読書記録カードを作成し、自分だけの読書記録を作る。そこで、作品を評価しながら自分の見方や考え方、感じ方

を作っていく面白さも感じられるだろう。「ごんぎつね」が、その記録の一つに位置づくことで、今回の学習への意欲を高めることにもつながるだろう。

○学習問題がより切実になっていくために○

「ごんぎつね」に出会った子どもたちは、「ごん」に気持ちを寄せて読んでいこう。いたずら好きの子もたくさんいるので、「ごん」に自分を重ねて読む子も多くいるだろうと考える。最後の結末部分が悲劇で終わってしまうことの空しさや悲しさを感じ、自分に置き換え「なぜ撃たれてしまったのか？」と、悲しい結末を受け入れられない気持ちをもつだろう。「悲しい」「ごんがかわいそう。」と、最後の場面に特化していこう。そうした初発の感想交流から、「だれのどんな場面の気持ちを読みたいか？」と問題を作っていく。「撃たれた時のごんはどんな気持ちだったのか？」「撃ってしまった兵十はどんな気持ちだったのか？」は、初発の時点から、話題に上がるだろう。中でも、一番子どもたちが解決したい問題は「うたれた時のごんはどんな気持ちだったのか？」である。この場面が、「悲しい。」と思っている多数の子たちに対し、「うれしい。」「感動した。」といった感想を出されることに、「ずれ」を感じるだろう。なぜそう思うのかを聞きあいたいだろうし、本当はどんな気持ちだったのかは、自分だけでは解決できない問題である。初発の感想交流で、他にも出てくるであろう「なぜいたずらをしてしまったのだろうか？」「どうしてつぐないを続けたのだろうか？」といった疑問を最初に位置づけ、だんだんとクライマックスの場面の問題に迫るよう読み進めていく。「いたずらせずにはいられなかったごん」「つぐないをやめることはできなかったごん」「撃たずにはいられなかった兵十」の不可避な状況が見えてくるからこそ、「撃たれた時、ごんはどんな気持ちだったのか？」という問題がより切実になってくると考える。さらに、本寺、話し合いの中で必要になってくる問題「ごんに、うれしいという気持ちがあったらどうか？」に焦点化し、考えを深めていきたい。

学習の過程では「じゃあ、これについてはどうだろう？」と関連させて次の問題へと深まっていく姿を目指す。そのために、交流後にはミニ学習感想を書いていく。そうすることで、最初に立てた学習問題でありながら、前時のつながりをふまえて考えられるように順序立てられるだろう。

○単元のねらいに近づく「ひびき合い」になるために○

最初は「気づいてもらってうれしかった。」「うたれて悲しかった。」「分かってもらってよかった。」「兵十をにくんでいる。」など、ごんの気持ちについて考えが分かれるだろう。前回の「一つの花」よりも成長し、場面同士を関連づけて読む力がついていれば、「憎んでいる」は出ないかもしれないが、「死んでいるのに「うれしい。」わけはない！という気持ちをもった子どもたちが、さらに分かってもらえたよさに気づいていくこと、悲しさの中に「気づいてもらえた。」というごんの安堵の思いに気づいていくことをひびき合いの姿」としたい。「悲しいか。」「嬉しいか？」は、はっきりどちらかに決められるものではない。いずれの気持ちも混ざってのこの気持ちである。その気持ちに迫るためにも、子どもたちの言葉を上手に板書し、柔軟に立ち位置を決められるようにマグネットで考えを示すようにする。また、「ごん」の気持ちが表れているのは「ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。」の一文である。その一文をどう解釈するかは、前の部分の読み取りと関係づけていくことになってくる。焦点化をする際には、この一文に注目していきたい。ごんがぐったりと静かにうなずいたことで、「お前だったのか？」の声に答え、自分の存在を明らかにできたという気持ちが理解できると、「分かってもらえてよかったけど、悲しい。」「分かってもらえて嬉しい。」「生きていたかったけど、分かってもらえてよかった。」などの言葉に変わってくるだろう。

5. 単元構想 4年国語「ごんぎつね」(全13時間)

単元目標

- 場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述をもとに想像して読むことができる。
- 文章を読んで考えたことを伝え合い、互いの考えの共通点と相違点を考えながら話し合うとともに、友だちの考えを受けて自分の考えを作ることができる。

読書タイム

新美南吉作品の読み聞かせ

- 「あめだま」「狐」
- ・おもしろい。・文六ちゃんかわいかった。
- ・「あめだま」は、さむらいを、怖いものだと勘違いするのがおもしろい。
- ・今度はどんなお話なんだろう？

学級文庫の充実をはかる。「かにのしょうばい」「でんでんむしのかなしみ」の他多数。また、新美南吉の生涯や生き方などが載った本など。

題名読み

「ごんぎつね」はどんなお話かな？④

- ・主人公が「ごんぎつね」なんだと思う。・どんなきつねなんだろう？・このお話知ってる！
- ・悪いきつねなんじゃない？・「ごんぎつね」はやさしいんじゃないかな。

全文通読・初発の感想を書く

- ・すごく悲しい。・でも最後、分かってもらえて嬉しいと思う。
- ・ごんがかわいそう。・でも最後は分かってくれたから感動した。
- ・でも最後は死んで悲しいと思う。打たれたくなかったと思う。
- ・兵十も、ごんにいたずらされて、お母さんいなくてかわいそう。
- ・なんでいたずらしたんだろう。・いたずらしなければよかったのに。
- ・気づかないのにつぐないをやめないなんて、すごい。・やさしいよ。
- ・ごんは、やさしくなったんじゃない？・優しさが芽生えたんだと思う
- ・でも、「引き合わないのに」なんでつぐない続けたんだろう？

登場人物と場面の確認。難読語の理解を押さえる。感想交流の中で、感想が集中している場面や、感想にずれのある場面を整理し、解決していきたい問題を明確にして、書いておく。

「ごん」はなんでいたずらををしたのかな？②

- ・いたずらが好きだったんだよ。・ごんは、寂しかったからだとおもう。「ひとりぼっち」って書いてある。・「しだのいっばいげった森の中に、あなをほって・・・」暗くて、寂しかったから、誰かに会いたくなっていたはずらしたと思う。・ごんぎつねだから、いたずらでも相手にされると嬉しかったんじゃない？
- ・いたずらがしたいわけじゃない。「うなぎをほどこき、置いておいた」と書いてある相手を怒らせても相手にされる方がまだまし。
- <学習感想>・でもこのあと、いたずらやめて償うよ。・ごんはいたずらをやるから、本当はわるいきつねではない。

なんで引き合わないのにつぐないを続けたのだろう？③

<何回つぐないをしたのだろう？>→思考の足場になるように整理する①

「ちょあんないたずらをしなけりやよかった。」→ 兵十を見に行く

「おれと同じ一人ぼっちの兵十か。」～盗んだけいわしをうら口から、なぜこんで

「うなぎのつぐないに、まず一つ、いいことをした。」「これはしまった。」

次の日には～山でくりをどっさり拾って、入り口にくりを置いて帰る

次の日も、その次の日も～くりを拾っては

その次の日には～くりばかりでなく、松たけも二、三本

月のいい晩～「だれだか知らんが、おれにくりや松たけなんかを、
毎日毎日～」

二人の後をつけるごん。お念仏の間井戸のそばでまつごん

かげぼうしをふみふみ、行きました。

「神様のしわざだぞ」→「神様にお礼をいうんじゃあ、おれは、引き合わないな。」

その明るる日も～くりを持って、兵十のうちへでかけました。うら口からこっそり中へ入る。

時系列で変化する行動からごんの気持ちの変化を読んでいる。<読>ノート
ごんの行動や気持ちの表す表現を見つけている。<意>

一人ぼっちの兵十から、月夜の晩までの間のごんの行動の時系列で子どもと共に整理する。そのことが、ごんの心情の変化を捉えやすくなり、足場となる。

だんだん兵十に、気づいてもらいたくなる

<ごんは兵十に気づかれたかったのだろうか？>③

- ・「神様にお礼を言うがいいよ。」「うん。」と言われて「引き合わない。」って言うてるから 気づかれないと思っている。
- ・ぜんぜんごんがつぐないをしてるっていうことを知らなかった。
- ・最初の「うわあ、ぬすつとぎつねめ。」から最後の「うなぎをぬすみやがった、あのごんぎつねめ」が、またいたずらをしにきたなまで、兵十のごんに対する気持ちは変わってないから、殺されるかもしれないから、気づかれないけど、気づいてほしいと思う。
- ・「くり」から「まつたけも」、「固めて置いて」「ついていって」「かげをふみふみ」ってだんだん気持ちは気づいてほしくなる。
- <学習感想>・でもうたれちゃうなんて、残酷。・この後さらに、思いがむくわれぬのが、かわいそう。

うたれた時、ごんはどんな気持ちだったのだろうか？②(本時)

うたれた時、ごんはどんな気持ちだったのだろうか？①

兵十をせめる気持ち

- ・「ひどい」「殺さなくてもいいのに」と思っていると思う。松茸とかも持っていったのに。
- ・「なんで打つんだよ。」打たなければもっとつぐないしてあげたり、なかよくしたりできたのに。
- ・死にたくなかった。

つぐないを後悔する気持ち

死ぬくらいなら、つぐないをしなければよかった。

ごんが「うなぎを盗む」ことに注目し、どんな気持ちで行動に表れているのかを読むようにする。

悲しい気持ち

- ・勘違いされてうたれてしまって悲しい。
- ・生きていたら、一人ぼっち同士友だちになれた。
- ・償いは自分だと分かってもらえたけど、もっと兵十と仲良くなりたかった。
- ・ちょっとした差で、うたれてしまって、もう気づくのが早かったらと悲しい。
- ・たくさんつぐないをじだのに分かってくれなくて、悲しい気持ち。

<うれしいとか、よかったと思う気持ちはあるのだろうか？>②

ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなぎきました。

領いたから兵十に思いがといた。

気づいてほしかった。ずっと一人ぼっちだったから、仲間だと言いたかった。

引き合わないな

うなぎを、神様じゃなく、ぼくだよと、返事をしたと思う。

かげをふみふみ行きました。

うなぎを盗んだら、兵十に伝わらないかもしれない。

おれと同じ、一人ぼっちの兵十か

うれしい気持ち

- ・やっとつぐないの気持ちが伝わった。
- ・自分のつぐないにきづいてもらえて嬉しい
- ・いいきつねだと分かってもらえた。
- ・生まれて初めて仲間になれたと思うから、うれしかったと思う。

よかったという気持ち

- ・「うなぎきました。」で、つぐないがごんだと分かってもらえたから、今まであきらめなくてよかったと思っている。
- ・兵十が打ったのも仕方がない。気づいてもらうには、これでよかったんだ。
- ・気づいてもらってよかった

登場人物の気持ちを、叙述をもとに考えて読んでいる。<読>ノート
読み取ったことを、友だちの考えと比較して聞き、生かそうとしている<意欲>

読後の感想を読書記録に残そう①

- ・悲しい結末で、読んだ後なんともいえない気持ちになった。
- ・わかり合うことって大切なことなんだと思った。
- ・何でも簡単に判断してはいけないし、命を大切にしないといけないとわかった。
- ・仲間を大事にしたいと思った。

読書記録に残し、自分と物語の出会いをふり返る。評価をしながら、他の読書へと発展できるように、他作品を読む時間をとっていく。

兵十はうってしまった後どんな気持ちだったのだろうか？①

「おや。」びっくりして、ごんに目を落としました。

ごん、おまいだったのか、いつもくりをくれたのは、

火なわじゅうを、ぱたりと取り落としました。

青いけむりが、まだつつりから細く出ていました。

- ・ごんが、くりを持ってきてくれて、びっくり。殺すんじゃないか！
- ・まさか、いたずらなごんがおれのために、こんなことをしてくれるなんて。
- ・よく見てからうてばよかった。・どうしてうってしまっただんだ！
- ・今うったばかり。もうもともとはもどれない。・悲しい。

<学習感想>・自分を責めてとても悲しい気持ちだったと思う。ごんも兵十も悲しいと思う。・悲しい終わり方だな。・このお話はどんなテーマだったのかな。・新美南吉さんの作品を他にも読みたいな。・他の悲しい結末のお話も読んでみたい。

6. 本時案

6. 本時案

本寺目標：「うなずいた理由を考えるを通して、うたれたごんの気持ちを自分なりに理解することができる。」

学習活動	主な支援・留意点・『評価』
※話し合いを終えて、今の自分の考えを書こう。 「うたれたごんはどんな気持ちだったの？」 「うたれたごんに思い残すことはあったのか？」 「ごん、お前だったのか。くりをくれていたのは。」 「ぬすつとぎつねめ。」から「ごん」になったりやさしい言い方 ごんはぐつたりと目をつぶったまま、うなずきました。 ・やつとわかってもらえたからうなずいた。 ・うなずかなかつたら、分かってもらえない。最後の力をふりしぼって。 ・静かにうなずいているし兵十をゆるしてる。 ・うなずいて「兵十、ごめんね。」という気持ちを伝えた。 ・うたれから「ごん、お前だったのか」と言われ、気づくのがおそくて悲しかったと思う。 ・うたれでから気づかれて悲しい。 ・「うたれずに気づかれたかった。」 ・勘違いされていたんだから、ショックだったと思う。 ・もつと兵十にかまってももらいたかった。 ・兵十をまた一人にさせてしまった。 ・よく見ていれば、仲良くなれたのに。 ・一人ぼっちの子ぎつね。 ・同じ一人ぼっち同士仲良くなったかったごん。 ・直接あやまればよかった。 ・中に入らなければよかった。 ・いたずらしなければよかった。 ・償いを続けなければよかった。 ・よかった。 よかった。 うれい。 よかった。 感謝。 ・気づいてくれてありがとう。 ・もう思い残すことはない。 納得・反省。 ・自分が悪いことをしてしまった。 ・んだから仕方がない。 ・ごめんさい。 ・運命だから仕方がない。	「うたれたごんがどんな気持ちだったか」について、友達の見解を聞いて、変容した部分から意見交流を始める。 ・ごんの気持ちが表れた唯一の場所である「うなずきました。」の部分に視点が当たった発言を中心に板書を構造化する。 ・「後悔している」の子の変容を促すためにも、ぐつたりと「目をつぶったまま、うなずく」という行為がどんな気持ちなのかを想像するためにやってみる時間をとることも考える。 ・「よかった・うれい」に集中する場合は、対立する二つの考え方に注目し、「思い残すことがあったか」と焦点を当てていく。ごんの気持ちがただ「よかった」ではないところに気づいていくきっかけにする。 ・前時までの読み取りや、叙述を基にした発言を認めていく。 ・最後にまた「うたれたごん」の気持ちを考え、ノートに書く時間をとる。今回の話し合いを生かした考えが書けるように、どうやって書くのかを具体的にアドバイスしていく。 ★登場人物の気持ちを、前時までの読み取りや、叙述をもとに考えて読んでいる。＜読＞ノート・発言。 ★友だちの考えと比較して聞き、自分の考えに生かそうとしている＜意欲＞。 ノート・発言。

7. 実践を終えて

(1) 単元を通した成果と課題

子どもたちは、「ごんぎつね」という悲劇的な終末を迎えるこの物語に、興味を持って読んでいた。みんなが初発の感想後に話し合いたいことを出し合い、それについて一つひとつ解決していきながら、読み深めていったが、毎回の話し合いの後に、学習感想を書くことで次の課題との関連性を高められるように工夫していった。

一番面白かったのは、「引き合わないのに、なぜ、ごんはつぐないを続けたのだろう？」ということ子どもたちと話し合った時のことである。追究がさらに追究を生み、読みがぐっと深まっていったからである。そして、国語でもそうした、探究的に深まっていこうとする子どもたちの成長を感じることが出来たからである。つぐないを続けた理由が、「反省していたから」「兵十がひとりぼっちでかわいそうだから」「気づいてもらいたいから」「仲間になりたかったから」などの意見が出ていた。どれが本当の理由かを考えるうちに、「反省」という立場の子どもから「気づいてもらいたいなら、なんでかくれるの？」という質問から、さらに「気づかれたいのか？」「気づかれないのか？」という問題に焦点化されていった。「気づいたら、殺されてしまう。」

『ぬすつとぎつねめ。』って思い続けているから、気づかれないはずだ。」と、「気づかれない。」に圧倒的多数の子どもたちがいた。しかし「かげをふみふみついて行きました。」「ずっと待っていました。」「引き合わないなあ。」の叙述から「自分の存在に気づかれないのではないか？」「仲良くなってほしいのではないか？」「つぐないを自分だと気づいてほしい。」という意見が出てきた。最後に実際に動作化をしてみることにになり、子どもからごん役を募り、やってみた。「ちかっ！」「ごん、兵十のペットみたい。」「気づいてほしい気持ちがあるよ。」と声があがり、「気づいてほしい気持ちをもっている。」ということに気づいていった。学習感想には、多くの子が「自分のしていることには気づいてほしい。でも殺されたくないから気づいてほしくない。」という両方の気持ちがあるが書かれていた。探究的な学習活動を単元の中で実現できたことはとても大きな成果だったと考える。

課題としてあげられるのは、その探究を生かして、本時の学習問題をわかりやすく焦点化し、深められなか

ったことである。本時、子どもたちは、「うたれたごんの気持ち」について考えた。単元構想を書いた時点では、自分のつぐないに気づいてもらえたことを「よかった。」と思うごんの気持ちを、子どもたちに気づいてほしいと考えていたので、「ぐったりと目をつぶったまうなずきました。」の叙述を中心として、読み取っていかうと考えていた。しかし、目の前の子どもたちの状態は、前に述べた前時までの探究的に読み取ってきたことを踏まえて、本時の問題について考えた子が予想よりも多くいたのである。つまり、ごんの気持ちを「気づいてもらえてよかった。」ととらえることが出来ている一方、ごんがやむなく死を遂げることについては、触れられていないという子がクラスの半数、逆に、「兵十がうたなければよかったのに。」「もっと仲良くなりたかった」と死について残念な気持ちを書いている子、「つぐないなんかしなければよかった」という後悔の気持ちを書いている子が残りの半数であった。この両極端な子どもたちが混在する状況のもと、授業者としては、「自分のつぐないに気づいてもらえてよかったが、死をもってそうしなければならなかったごんの切ない気持ちに迫ってほしい」と思い、授業の出所を考えていった。

実際の授業では、子どもたちが両極端な状況を理解し、一生懸命自分たちの言葉で互いの読み取りをすりあわせていった。板書で「ぐったりと目をつぶったまうなずきました。」を焦点化すればするほど、「後悔した」と言っていた子が「よかった。」に傾いていった。しかし、「それだけだったのかな?」「悲しいという気持ちはなかったのかな?」といった切りかえしで、読みを深めていったが、なんとなく両者に共通して焦点化する言葉を明示できずに、なんとなく両方の気持ちが存在しているなという子どもたちの気づきによって授業が終わっていった。

「自分のことに気づいてほしい気持ち」→「気づいてもらえてよかった」 「兵十に殺されたくないから気づいてほしくない気持ち」→「?」

考えてみれば、上記のように、前時の終わりに子どもたちが理解していったごんの「気づいてもらいたい気持ち」と「気づいてもらいたくない気持ち」とをふり返って、焦点化することで、もっと話し合い自体も整理されたものになっていったし、シンプルに自分の考えを問い直されていったのではないかと考える。前時の子どもの思考や、前時を生かした子どもたちの思考を見取ることが甘く、それを基にした補助発問を準備できなかったことが最大の課題であった。

単元を通して、徐々に前時の思考を生かし、登場人物の気持ちを、前の場面、その前の場面と関連づけて思考することが出来てきたことは確かである。授業者である自分が、その育ちを見とれずにいたことを反省するだけでなく、単元の中で育つ子どもたちの育ちの速さに驚いた。この単元での学習が、次の学習や各教科の学習に生かせるように、育てていきたいと思った。

(2) その後の子どもたちの育ちと課題

その後の授業でも、子どもたちの思考を大切に、共に創る授業を目指して進めてきた。特に社会の「私たちのくらしとゴミ」では、「そもそも、なぜゴミは少ない方がよいのか?」という疑問をもち、その予想について話し合った。予想をもとに、根拠となる事実を資料から探し、追究していった。そこで分かったことからさらに、「燃えるゴミを少なくするにはどうしたらよいのか?」という次の追究へと進んでいった。自分だけでは解決できない問題を、友だちと協働して追究していこうとする姿は、十分育ってきているように思う。発言の少ない子も、活発に主張する子どもたちの意見を取り入れ、自分の考えを構築しようと努力する姿がある。その子たちが、マグネットをはって活発に主張した子の意見に賛同することで、十分支え合って追究が出来るのではないかなと思う。

一方で、「自分の問題をとことん追究する姿」については、ここに差がある。社会科で「燃えるゴミを少なくするにはどうしたらよいのか?」という問題を持ったときに、自主的に資料を探したり、読んだりして追究してきた子たちがいた。段ボールコンポストのことや、分別の徹底、食品ロスの問題・・・など、多岐にわたっており、とても魅力的な追究ができています。しかし、資料をさがせず、なんとなく追究ができずに終わってしまう子もあり、粘り強い追究が出来るように励ましたり、一人ひとりにあうように資料をアドバイスしたりした。個々の「とことん追究」を実現するためには、知的好奇心を高める学習活動をどれくらい多く出来るか

にかかっていると考える。一人ひとりの知的好奇心を高め、自分なりの問いと出会い、自分の事としてその問いを解決したいと思うことが大切である。問題解決的な学習では、人数が増えれば増えるほど、集団の問題となりにくく、自分にかかる負担が少なく他人と支え合って解決されてしまう。そうではない、魅力的で、知的好奇心から自分がやってみたい、知ってみたいという動 lựcになり得る学習材との出会いを今後も考えていきたい。